



## 「いつか花開くことを信じて」

副校長 田宮 真樹

早いもので、令和7年になって1か月が過ぎようとしています。

皆様は年末年始、どのようにお過ごしだったでしょうか。私にとってお正月といえば箱根駅伝。生中継を見つ、テレビのデータ放送を使って個人順位をチェックし、「テレビには映っていないけど、〇〇大学の□□選手が区間賞を取りそうだ!」などと一人熱く応援しています。今大会は、青山学院大学の2年連続8回目の総合優勝で幕を閉じました。

思えば小学校入学前、当時大磯に住んでいた祖父に連れられ、箱根駅伝を観に行ったことがきっかけで、興味をもつようになりました。当時はまだ沿道で応援する人も少なく、選手が走っていく様子を簡単に観られたように思います。それが今では、沿道でおよそ100万人が応援し、テレビ視聴率も20～30%ある国民的な行事になりました。

今大会、一番驚いたのは6区山下りでした。東海大学（現DeNA）の館澤亨次選手が持っていた57分17秒の区間記録を、青山学院大学4年の野村昭夢選手が56分48秒で駆け抜け、大幅に記録を更新しました。館澤選手は、私がかつて6年担任をしていた際、別のクラスにいた子で、「すごい!よくやった!この記録は当分抜かれないな。抜かれてほしくないな。」と思ったものでした。

野村選手は、1年生と2年生では、箱根駅伝などの大きな駅伝には出場しておらず、3年生になってから出場できるようになった選手です。高校時代、5000mで全国優勝していますが、やはり青山学院大学は層が厚いのでしょう。上級生には敵わず、出場機会に恵まれなかったのではないのでしょうか。それでも腐らず地道に努力を重ねた結果が、今回の好記録につながったのだと思うと胸が熱くなります。

以前、大東文化大学で駅伝監督を務め、当時関東陸連の会長だった青葉昌幸さんの講演を聞いたことがあるのですが、選手をスカウトするときは、記録だけでなく選手の性格も大切にするそうです。「記録はそこまでよくなくても、1・2年生で努力を続けられ、3・4年生で花開くような選手に来てほしかったし、育てたかった。」と話されていました。

学校教育でも家庭教育でも、すぐに成果が出ることもあれば、時間をかけて成果が出ることもあります。我々大人があせらずじっくり関わり、いつか花開くことを信じて粘り強く子どもに関わっていくことが大切だと考えています。小学校で花開かなくとも、中学、高校、大人になって花開くこともあることでしょう。学校と家庭が協力し合い、子どもたち一人ひとりの将来をイメージしながら共に歩んでいけるよう、今後もよろしくお願いいたします。

【留守番電話設定】平日 17時00分から翌朝7時45分までは留守番電話を設定しています。